ISSN 0027-9153

月報

国立国会図書館

造本・装幀文化の保存と伝承

造本装幀コンクールと原装保存の意義

ビッグデータ時代の図書館の挑戦　―研究データの保存と共有

世界図書館紀行　クアラルンプール

2014.6
No.639

国立国会図書館利用案内

東京本館

所　在　地　〒100-8924　東京都千代田区永田町1-10-1
電話番号　03(3581)2331
利用案内　03(3506)3300(音声サービス)
ホームページ　http://www.ndl.go.jp/
利用できる人　満18歳以上の方
ただし、満18歳未満の方には、個別に相談に応じています。詳しくはホームページをご覧ください。
資料の利用　館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日　日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料　和洋の図書、和雑誌、洋雑誌(年刊誌、モノグラフシリーズの一部)、和洋の新聞、各専門室資料

サービス時間

開館時間　月～金曜日 9:30～19:00 土曜日 9:30～17:00
※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の開室時間は 17:00までです。
資料請求受付★　月～金曜日 9:30～18:00 土曜日 9:30～16:00
※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の資料請求時間は16:00までです。
即日複写受付　月～金曜日 10:00～18:00 土曜日 10:00～16:00
後日郵送複写受付★　月～金曜日 10:00～18:30 土曜日 10:00～16:30
★登録利用者限定のサービスです。

■見学のお申込み／国立国会図書館　利用者サービス部　サービス運営課　03(3581)2331　内線25211

関西館

所　在　地　〒619-0287　京都府相楽郡精華町精華台8-1-3
電話番号　0774(98)1200(音声サービス)
ホームページ　http://www.ndl.go.jp/
利用できる人　満18歳以上の方
ただし、満18歳未満の方には、個別に相談に応じています。詳しくはホームページをご覧ください。
資料の利用　館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日　日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料　和図書・和雑誌・新聞の一部、洋雑誌、アジア言語資料・アジア関係資料(図書、雑誌、新聞)、
科学技術関係資料、文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、博士論文

サービス時間

開館時間　月～土曜日 10:00～18:00
資料請求受付★　月～土曜日 10:00～17:15
セルフ複写受付　月～土曜日 10:00～17:30
即日複写受付　月～土曜日 10:00～17:00
後日郵送複写受付★　月～土曜日 10:00～17:45
★登録利用者限定のサービスです。

■見学のお申込み／国立国会図書館　関西館　総務課　0774(98)1224［直通］

国際子ども図書館

所　在　地　〒110-0007　東京都台東区上野公園12-49
電話番号　03(3827)2053
利用案内　03(3827)2069(音声サービス)
ホームページ　http://www.kodomo.go.jp/
利用できる人　どなたでも利用できます。
資料の利用　館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日　月曜日、国民の祝日・休日(5月5日こどもの日は開館)、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
※第一・第二資料室は、休館日のほか日曜日に休室します。メディアふれあいコーナーと本のミュージアムは、行事等のため休室することがあります。
おもな資料　国内外の児童図書・児童雑誌、児童書関連資料

サービス時間

開館時間　火～日曜日 9:30～17:00　※1階子どものへや、世界を知るへや、3階メディアふれあいコーナー、本のミュージアムの利用時間は、開館時間と同じく9:30～17:00です。
第一・第二資料室の利用時間　閲覧時間　火～土曜日 9:30～17:00　資料請求受付　火～土曜日 9:30～16:30
複写サービス時間　即日複写受付　火～日曜日 10:00～16:00　後日郵送複写受付　火～日曜日 10:00～16:30
複写製品引渡し　火～日曜日 10:30～12:00　13:00～16:30

■見学のお申込み／国立国会図書館　国際子ども図書館　03(3827)2053［代表］

6 June

CONTENTS

02 俳優楽屋双六　バーチャル楽屋見学の楽しみ
今月の一冊　国立国会図書館の蔵書から

04 造本・装幀文化の保存と伝承
造本装幀コンクールと原装保存の意義

10 図書資料の原装保存について

12 ビッグデータ時代の図書館の挑戦
―研究データの保存と共有

17 中高生への読書推進を考える
子ども読書連携フォーラムから

20 世界図書館紀行　クアラルンプール

27 館内スコープ
書誌データの品質管理

28 本屋にない本
○『帝国劇場100年のあゆみ　1911-2011』

29 お知らせ
○全国書誌（電子書籍・電子雑誌編）の提供開始
○平成26年度の図書館員を対象とする研修
○利用者アンケートご協力のお願い
○中高生のための「国立国会図書館の仕事」紹介
○国際子ども図書館夏休みイベント「科学あそび2014」
○国際子ども図書館電子展示会「中高生のための幕末・明治の日本の歴史事典」提供開始
○電子展示会「ブラジル移民の100年」をリニューアル公開
○新刊案内　国立国会図書館の編集・刊行物

今月の一冊 June

国立国会図書館の蔵書から

俳優楽屋双六 バーチャル楽屋見学の楽しみ

伊藤　りさ

俳優楽屋双六
一寿斎国貞 画　海老屋林之助　文久3(1863)年 刊
1舗　49.2×107.2cm
「楽屋舞台寿古録」所収
<請求記号　寄別8-3-2-4>
※古典籍資料室所蔵
※「国立国会図書館デジタルコレクション」で閲覧可能（http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1304313）

歌舞伎の楽屋を双六仕立てで描いた錦絵である。顔触れから見て、文久2(1862)年の市村座の楽屋を描いたものかと思われる（厳密には異なる部分もある）。演（だ）し物は何だろうか。

右下が「ふりはじめ」（振り出し）で、さいころの目によって「作者部屋」「はやし部屋」「頭取座」（楽屋の事務方の取りまとめをする俳優の居所。出勤をチェックする着到板が見える）「花道通」「仁諧階（にかいばしご）」（二階への階段）「湯場」のいずれかに進む（ちなみに、作者部屋には河竹新七、後の黙阿弥がいる。囲み①）。升目にはこのほかに「座頭（ざがしら）部屋」（一座のトップ俳優の楽屋）「立女形（たておんながた）部屋」（一座のトップ級女形役者の楽屋）「小道具部屋」などがある。江戸時代の芝居小屋の楽屋は、俳優の等級によって厳密に部屋分けと位置（階数）が定められていたが、盤上の上下の配置は、おおむねそれにのっとっているようである。

絵双六は江戸時代に登場し、錦絵の興隆に伴って発達した。「廻り双六」と「飛び双六」とがあるが、一筋に並べられた升目を順々にたどって進むのが廻り双六で、ふつう「双六」と聞いて思い浮かぶのはこのタイプだろう。飛び双六は、盤面の指示（囲み②）に従って、絵の中（飛び双六の「目」は、絵の一部として描かれているものも多い）を飛び回るように駒を進めていく。

「俳優楽屋双六」は飛び双六で、さいころの目に従って盤上を行き来するうちに、楽屋でくつろいだり、舞台の扮装をしたり稽古をしたり

する、俳優たちの素の姿を楽しむことができる。役者は似顔絵で描かれ、一人ひとりの名前が書かれた短冊がついているので、双六として遊ぶほかにブロマイド写真のような役割も果たしたかもしれない。

また、関係者以外はなかなか立ち入ることのできない楽屋の様子もうかがえる。近年は「舞台裏を見たい」という熱心なファンの要望に応えるためか、劇場のバックヤードツアーなどが行われており、舞台機構の裏側などを見学できることもあるが、それでも楽屋まで入る機会というのはあまりないだろう。

歌舞伎に親しむようになるにつれ、舞台とは違う俳優の普段着の様子を見てみたい、通常は入れない舞台の裏も見てみたい、と思うのは今も昔も変わらないファン心理である。歌舞伎俳優が楽屋でどのように過ごしているのか知りたい、素の姿を見たい、という江戸時代の民衆の要求が、このような双六（錦絵）を生んだのだろう。そう考えると、この双六も単なる過去の遺物ではなく、誰にでもある素朴な好奇心を伝えた身近なものに感じられる。

なお、芝居小屋の楽屋を描いた双六には「大当楽屋寿語六」（豊原国周 画　井筒屋庄吉　慶応1（1865）年 刊）というものもあるが、こちらは進む先の指示が俳優の名前になっており、細かい字でせりふも書き込まれている。「俳優楽屋双六」が主に楽屋全体の様子や雰囲気を描いているとすれば、「大当楽屋寿語六」は俳優に主眼を置いた構成と言えるだろう。お目当ての俳優を探しながら、画面を丹念に見ていくのも楽しそうだ。残念ながら当館では所蔵していないが、東京都立図書館のホームページ[1]等でデジタル画像が公開されているので、「俳優楽屋双六」と見比べてみるのも一興かもしれない。

（いとう　りさ　利用者サービス部人文課）

囲み②（拡大）次に進む升目の指示。書いていない出目は一回休み。

1 http://www.library.metro.tokyo.jp/Portals/0/edo/tokyo_library/kabuki/page2-1.html

造本・装幀文化の保存と伝承

造本装幀コンクールと原装保存の意義

浜田桂子（絵本作家・画家）

2013年度より国立国会図書館において、造本装幀コンクールの出品書籍が、函やケース、カバー、帯など、本が出版されたときの装幀のまま、つまり原装で保存されることになった。このコンクールに審査員の立場で関わってきた者として、今回の国立国会図書館の英断を喜びつつ、その意義を造本・装幀の視座から記してみたい。

『第47回造本装幀コンクール公式パンフレット』

1、造本装幀コンクール

毎年、日本書籍出版協会と日本印刷産業連合会の共催で、造本装幀コンクールが開催されている。1冊の本を、出版、印刷、製本、装幀デザインの総合的な観点から評価する出版界唯一のコンクールで、1966年に始まり半世紀近い歴史を経て今年第48回を迎える。

コンクールは、前年の1年間に出版された書籍が対象で、部門別に「文学・文芸」「芸術書」「児童書・絵本」「専門書」「語学・学参・辞事典・全集・社史・年史・自分史」「生活実用書・文庫・新書・双書・コミック・その他」と分けられ出品される。応募者は、出版に関わる会社、エージェント、装幀家で、意欲的な自信作が提出される。

応募作品数は300点を大幅に超える。審査の折、出品内容表とともに机に並べられ一堂に揃うさまは壮観だ。

賞は、コンクールを後援している文部科学省、経済産業省、東京都の名前が冠された3賞と、審査員奨励賞があり、こちらは私を含めた5名の審査員が担当。加えて主催団体・後援団体賞が各団体代表の審査員によって決定される。

応募の書籍は全点が7月上旬に開催される東京国際ブックフェアで公開展示されるが、このブースの人気は高く毎年来場者が多い。

さらに、入賞作品は世界最大の国際図書展であるフランクフルト・ブックフェアで展示されるとともに、ライプツィヒで開催の「世界で最も美しい本コンクール」に出品される。日本の造本・装幀の水準は高く、昨年は『魯迅の言葉』(平凡社)が銀賞を、今年は詩集『トットリッチ』（土曜美術社出版販売）が栄誉賞を受賞した。

2、造本・装幀とは

造本装幀コンクールに、私は2007年から審査員として関わってきた。毎年、応募作品に向かいあうたび、造本・装幀というクリエーションの奥深さを考える。

造本・装幀とは、書物の内容の社会に向けての可視化である。原稿用紙の束を、あるいは膨大なデータを、写真や絵のようなビジュアルを1冊にするとき、著者の思考や概念が立ちあがる。装幀家に求められるのは、それらをどのように社会にコミットさせるかの洞察力だ。さらに、デザインイメージを立ち上げ「本のかたち」に定着させるには、地味で基本的な知識が不可欠になる。製本について、印刷について、文字や組みについて、用紙についてなど。日本には本づくりの豊かな伝統があり、技術は日々革新されてきた。装幀家はそれらを熟知し、初めてオリジナリティあふれた自在なデザインをすることが可能になる。本は商品でもあるので、経費という壁が常に立ちはだかる。厳しい出版条件を逆手にとり、クリエーションの味方にしてしまうしたたかさが必要だ。

審査は、応募作品を手に取ることから始まる。本の重さ、感触、開きやすさ、本文のエディトリアル、1冊のたたずまい。デザインの要素として、函、カバー、帯、表紙、見返し、扉、小口（背表紙の反対側の断面）、天地（本の上と下）、花布（はなぎれ）、栞など、すべてが重要だ。それらが必然の関係性をもち響き合ったとき、美しい立体としての「本のかたち」になる。

原装保存が始まる2013年度の受賞作品から、2点紹介したい。

『われた魯山人』

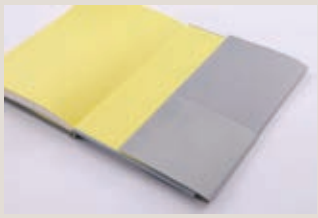
日本には「金継ぎ」という、壊れた器の痕跡すら美に収れんさせる美意識と技術がある。その金継ぎ

第47回造本装幀コンクール
文部科学大臣賞・出版文化国際交流会賞

『われた魯山人』
出版社　（株）フォクシー
装幀者　MOMENT　渡部智宏、平綿久晃

第47回造本装幀コンクール
日本印刷産業連合会会長賞
世界で最も美しい本コンクール栄誉賞

『トットリッチ』
出版社　土曜美術社出版販売（株）
装幀者　長澤昌彦



『第47回造本装幀コンクール公式パンフレット』より転載
撮影 澤田和廣

を、折り返しの白いカバーの切れ目の実在感で表現した。切れ目からはカバー裏側の金色が覗く。

『トットリッチ』

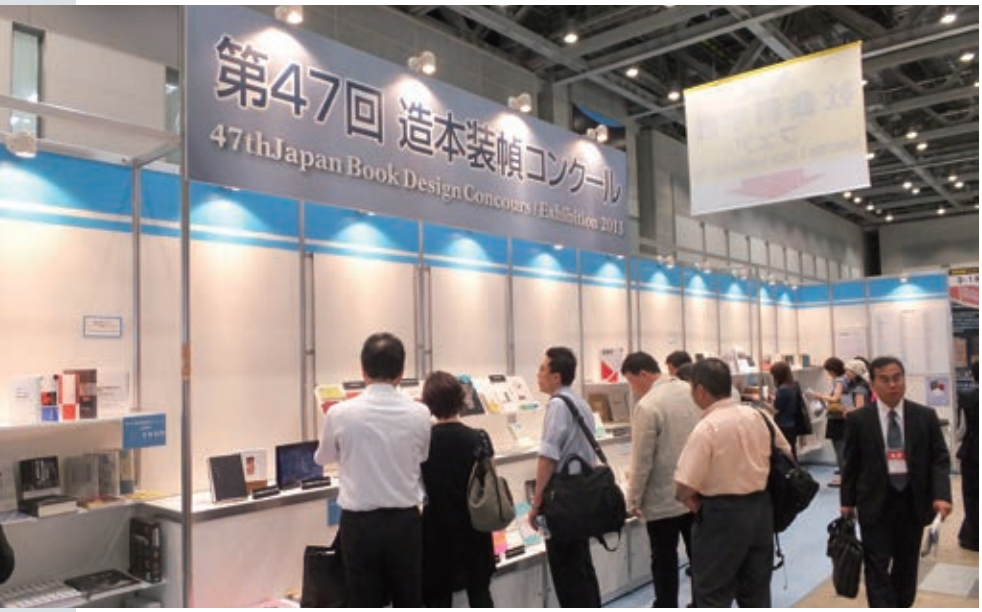
夜と朝の曖昧な時間に聞こえる「トットリッチ」という鳥の鳴き声から始まる詩集の世界観を、本のたたずまいで表現。カバーのグレーラシャ紙にホワイト、シルバーで刷られた装画。色調が違うグレーの帯。表紙のグレーのグラデーションで、おぼろな夜明けを連想させる。見返しは黄色。白色度が高い本文紙で、天地、小口の白が美しい。物静かな本が前述のとおりライプツィヒの「世界で最も美しい本コンクール」で栄誉賞を得たのは嬉しい。

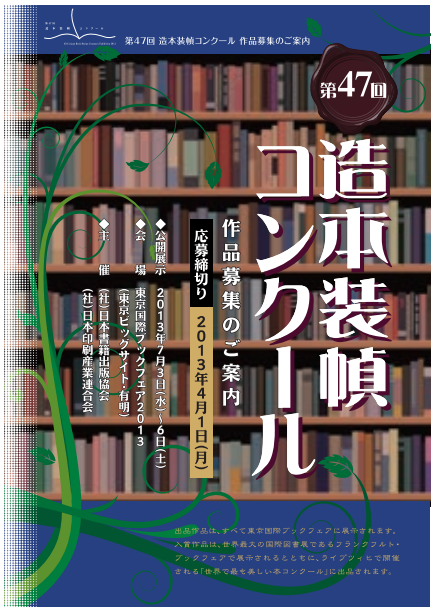
造本装幀コンクールの意義は大きい。

仕事の成果を顕彰し内外に紹介することで、「美しい本」をつくろうとする人たちを励ましてきた。文化は人が創る。意欲の炎を絶やすことなく、いっそう燃えさかるように薪をくべる役割は何より重要だ。フランクフルト・ブックフェアでの展示や、ライプツィヒのコンクール参加も大きい。日本の造本・装幀の素晴らしさを紹介するとともに、さまざまな国の作品から新しい試みや動向を学ぶことができる。

国内で「美しい本」の存在を知らしめることは、一般の人たちの本への関心を高めることにつながる。出版不況や活字離れが言われて久しい。対策は容易ではないが、思わず手にとってしまうような本との出会いは大切だ。本は、読まれて命が吹きこまれる。本づくりの意欲と読者の期待が熱く合致し、相乗効果をもたらすことで出版文化は育っていくのだと思う。

造本装幀コンクールは、間もなく半世紀を迎える。応募作品あってのコンクールだが、この間、主催団体や後援団体、事務局、審査員も含め、多くの人たちの地道な努力が重ねられてきた。とりわけ18年もの長い間、審査員、審査委員長を務めた故児玉清さんの尽力は大きい。私は4回、審査をご一緒した。本をこよなく愛した児玉清さんは、本づくりに携わる人たちに深い敬意を払われていた。このコンクールを社会的にもっと広く認知させたいと情熱的に取りくまれ、常に具体的な提案をされた。児玉清さんの熱意を引きついでいかなければと思う。





3、造本・装幀と時代背景

日本には造本・装幀の豊かな歴史があり、私たちはその恩恵に浴している。

日本でもっとも古い造本・装幀の形式は「巻子本（かんすぼん）」いわゆる「巻物」だ。奈良時代に中国から伝わり、絵巻や経巻にその形を残す。巻物は、時間の経過を表現する最適な形態で、この特性を生かした心躍る絵巻物が私たちに残されている。巻物は両手で広げ、右手で巻きとりながら見ていく。右は過去、左は未来で時間が流れる。その流れに添うため絵の構成は綿密に計算されており、現在の紙芝居や絵本、アニメーションに示唆を与えている。巻物の造本・装幀最高傑作は、1164年に厳島神社に奉納された「平家納経」だろう。水晶の軸、金具の表紙、見返し絵、金銀箔が散る料紙。心行くまで実物を見られたらと、叶わぬ夢を抱いている。

巻子本を一定の幅で前後に折りたたみ、冊子の形にしたのが「折本（おりほん）」だ。平安時代に、やはり中国から伝わった。折本は巻物と違い、見たいところがすぐ開ける。繰り返し利用しても折り目が傷まぬよう、工夫が重ねられた。今もお経本や絵本、宣伝物に登場している。

江戸時代になると、現在につながる商業出版が始まった。書物は一部の階級のものでなくなり庶民も楽しむようになる。本は木版で刷られ、刷られた面を表にして折り、折り目とは反対側を綴じる「袋綴（ふくろとじ）」で製本された。なお江戸初期には、流麗なかな文字が活字で刷られた、「嵯峨本」がつくられている。

明治に入り、外国人向けに「ちりめん本」が出版された。日本の民話や昔話を欧文に翻訳した絵本で、絵は多色摺り、文は活版で刷られ、紙をちりめんの布のように加工して本にした。とても精工で、日本を外国に知らしめようとする熱意が伝わる。

国立国会図書館所蔵資料より

巻子本
『十二月遊び』［寛文・延宝頃］[写]
＜請求記号　WA31-19＞

嵯峨本
『伊勢物語』　慶長13年
＜請求記号　WA7-238＞

ちりめん本
Monthly changes of Japanese street-scenes : calendar for 1901
長谷川武次郎 著　T. Hasegawa　1899
＜請求記号　W331-B1＞

※上記3点は国立国会図書館デジタルコレクションでご覧いただけます。

本は技術革新とともにつくられてきた。

その本づくりを揺るがす波が、近年押し寄せた。電子書籍の登場だ。電子書籍用端末やタブレットが次々と発売され、「紙の本はいずれ消滅する」という極論まで現れた。しかし長い年月、紙媒体の本を読み続けてきた私たちのDNAが、そう簡単にデジタルに切り替わる訳でもない。むしろ差別化によって紙本の良さが浮かびあがり、同時に電子本の良さを知るということだろう。電子本は、装幀家を刺激している。いっそう五感に訴えるようなデザインが増え、紙本ならではの実験もされている。

そして2011年、私たちは3.11を経験した。極限状態にある被災者が水や食料とともに渇望したのは、本だった。本には人間の命を鼓舞する力があるのだと、改めて知った。「人間にとって本とは何か？」の根源的な問いとともに、いまだ苦難の最中にある多くの人たちのことを思わずにはいられない。

4、国立国会図書館で本を原装で保存することの意義と期待

原装保存のことを初めて知ったとき、喜びとともに私が感じたのは、深い安堵だった。国立国会図書館という場で、その時代の造本・装幀文化が保存され、確実に未来へ伝承される安心感だ。年度ごとに、出版領域をほぼ網羅した数百冊の書籍がまとまっていることが大きい。「保存」という行為は、地味で努力と忍耐を要する。しかし「保存」こそ、文化の根幹となるものだ。意義を考えると期待がふくらむ。

意匠の伝承

今まで述べてきたように、装幀は本の内容と分かちがたく結びついた創作であり、包装紙ではない。出版を成立させている重要な要素で、意匠そのものが文化なのだ。造本･装幀にも流行がある。今後、年ごとに俯瞰できるのは貴重だ。

物質としての素材の伝承

本は、装幀家のイメージによって入手可能なさまざまな素材でつくられる。新たに開発される素材もある。紙、布、皮、金属など多種にわたるが、紙ひとつ取ってみても、再生紙や木を原料としないものも含め、実に多様な紙が生産されている。物質としての素材の発信力は強い。

技術の伝承

その時点の最高水準の印刷技術、製本技術が保存される。印刷の再現性やインキの環境への配慮など、さらに進化していくだろう。製本については、ほぼ全出版領域の書籍が揃うのであらゆる形態を見ることができる。

時代感覚の伝承

出版の意欲は造本・装幀に端的に現れる。なので、その時代独特の感覚や空気感が透けてくる。かつては金や銀が多用された豪華本や、畳半畳もある大きな写真集に出会った。そんな気分ではない現在、やはりそのような本は姿を消している。時代を直接証言するのは帯だろう。帯の言葉をたどると、読者の嗜好も見えてくる。

今回執筆にあたって国立国会図書館に伺い、担当者から原装で保存する取り組みについて説明を受けた。その折に館内を案内して頂き、特別保存の多くの貴重本と対面する機会を得た。そこには歴史に登場するような海外の初版本や国内の話題本、限定本から戦争中の発禁本まで、出版当初の装幀のままで並んでいた。1週間ほどこの部屋に潜り込めたらどんなに幸せだろうと、思ったことだ。ユニークな装幀本としては、なんと浅草海苔が貼り付いた『当世豆本の話』や、蓑虫の蓑で覆われた『書斎の岳人』など、たくさんあった。このような貴重本の保存にしても、今回の原装保存にしても、制度や規則だけによるものではなく、多くの関係者の情熱によるものと痛感した。「造本・装幀は文化」という思いを共有できたのは嬉しかった。

今後原装本は展示会に貸し出される。ぜひ多くの人と出会ってほしい。装幀家に制作過程の話をしてもらったり、子どもたちと装幀デザインのワークショップを行うのもいい。本の見方がぐんと豊かになる。

日本、中国、韓国で造本・装幀の交流ができないだろうか。日本は本づくりを中国や朝鮮から学んだ。ルーツを同じくする装幀家たちが集い、語りあい、より美しい本を世界に発信する。実現は可能だと思っている。

『当世豆本の話』（装幀者　内藤政勝）
斎藤昌三 著　青園荘　昭和21年
＜請求記号　UM11-33＞

『書斎の岳人』（装幀者　斎藤昌三）
小島烏水 著　書物展望社　昭和9年
＜請求記号　663-83＞
※国立国会図書館デジタルコレクションでご覧いただけます。

浜田桂子（絵本作家・画家）

1947年、埼玉県生まれ。桑沢デザイン研究所卒業後、アートディレクター故田中一光氏の助手を経て、子どもの本の仕事を始める。日本児童出版美術家連盟、日本文藝家協会会員。

2007年から造本装幀コンクールの審査員をつとめる。現在国内外の子どもたちとの絵本交流も多い。絵本に『あやちゃんのうまれたひ』、『あそぼうあそぼうおとうさん』、『てとてとてとて』、『ぼくがあかちゃんだったとき』、『さっちゃんとなっちゃん』、『ぼくのかわいくないいもうと』、『おやおやじゅくへようこそ』、『あめふりあっくん』、『へいわってどんなこと？』（日・中・韓平和絵本シリーズ）、イラストエッセイに『アンデスまでとんでった』など、著書多数。

図書資料の原装保存について

国立国会図書館は、出版文化史上、あるいは造本・装丁上意義があり、将来に示唆を与えると考えられる国内刊行図書を複本として収集し、外箱やカバー等を取り外さずに原装のまま保存することになりました。ここでは、当館が収集を開始した経緯と収集対象資料の概要等についてご紹介します。

＜収集開始の経緯＞

国立国会図書館で受け入れた資料は、通常、外箱やカバー、帯等を取り外して保存・提供しています。公共図書館等では、カバー等の破損を防ぐためにフィルムによるコーティングを施しているところも多いのですが、当館のように大量の資料を永久保存する場合、フィルムによるコーティングが長期的に資料にどのような影響を与えるかが確認されていないことなどから、一部資料を除き[1]、この方法は採用していません。

その一方で、日本国内で刊行された図書を外箱やカバー、帯等を含めた原装のまま保存してほしいとのご要望も長年にわたり寄せられていました。そこで、平成22年度から国立国会図書館内で検討を重ね、海外の国立図書館でも資料を原装のまま保存するために、利用提供用の資料とは別に保存用複本コレクションを構築している例があったことから、国立国会図書館では、平成25年度から原装のままの保存用複本の収集を開始することになりました。

収集する複本の範囲は、前述したように、「出版文化史上、あるいは造本・装丁上意義があり、将来に示唆を与えると考えられる国内刊行図書」とし、収集した複本は、公共的性格を有する展示会に貸し出す以外の利用提供、例えば、一般の閲覧や複写等には供さないこととしました。さらに、当分の間は、国内で開催された装幀関係のコンクールに出品された図書等を収集対象とし、収集対象の範囲拡大を今後検討することとしました。

これは、図書館資料を原装で保存することが当館にとっては初めての経験であること、また、近い将来、書庫の満架が予想されることから、最初は少ない数を試験的に保存し、必要な書庫のスペースや経費、資料管理等について経験を積む必要があると考えたためです。

＜収集対象資料の概要＞

収集の対象を確定するため、国内で開催される装幀関係のコンクールについて調べたところ、日本書籍出版協会、日本印刷産業連合会の主催で昭和41年から毎年1回開催されている「造本装幀コンクール」（本誌4ページ参照）が、日本で開催される造本・装幀に関する唯一のコンクールであることが分かりました。「造本装幀コンクール」に出品された作品は、原則として主催団体に寄贈され、主催団体はそれらを公開展示後、図書館等の公共施設に寄贈しているとのことでした。

このため、同コンクールの主催団体である日本書籍出版協会、日本印刷産業連合会に当館の計画を説明して同コンクール出品作品の寄贈を依頼したところ、快くご了承をいただき、平成25年の第47回コンクール以降、主催団体に寄贈された作品を国立国会図書館に寄贈していただくことが決まりました。さらに、日本書籍出版協会・日本印刷産業連合会の、コンクールの「作品募集のご案内」にもその旨を紹介していただきました。

1　国際子ども図書館では、2000年の開館以降に受け入れた児童書資料は、原則として、カバーを取り外さずフィルムによるラッピングをして保存・提供しています。

なお、「造本装幀コンクール」の出品作品のうち、海外のコンクールに出品される入選作品をはじめとして、様々な理由で寄贈されなかった作品については、当館が可能なかぎり購入等で収集することとしました。平成25年の第47回コンクールに出品された作品は374点、そのうち277点を平成25年12月にコンクールの事務局から寄贈いただき、その後、残りの資料についても、出版社にお願いして寄贈いただいたり、購入の手続きを取るなどして、平成26年4月末現在で計366点を収集することができました。

＜保存・利用提供＞

収集した資料は、外箱やカバー、帯等を取り外さずに、そのまま中性紙の保存用の袋に入れ、関西館の書庫で保存しています。当館では、通常、図書館資料には、バーコードラベルや請求記号ラベルを貼りますが、原装で保存する複本については、資料への押印やラベルの貼付は行わず、保存袋に識別用の一連番号を標示することで代替しています。

これらの資料は、一般の閲覧や複写には供さず、「国立国会図書館展示会出品資料貸出規則」[2]に基づき、公共的性格を有する展示会に限定して貸し出します。国立国会図書館では、従来、図書館をはじめ、美術館や博物館、文学館等で開催される公共性の高い展示会に所蔵資料を貸し出すサービスを行っており、国内のみならず海外の機関にも資料を貸し出しています。収集を開始した原装で保存する複本についても、公共的性格を有する展示会を開催する場合であれば、国または地方公共団体だけでなく、印刷・出版関係をはじめとする民間団体にも貸し出します[3]。

なお、原装で保存する複本については、一般の資料とは異なり、NDL-OPACでは検索できませんが、リストを当館ホームページの関西館のページに掲載しています[4]。展示会のための貸出しを希望される場合は、リストにご希望の資料が掲載されていることを確認した上で、関西館資料案内にお申し込みください。

数百冊で始まるささやかなコレクションですが、紙や印刷技術、そして時代を反映する意匠を後世に伝える、本という三次元の物体の記録として伝承していきたいと考えています。

＜おわりに＞

図書館資料の利用と保存の両方に万全を期そうと考えると、保存を目的とする複本のコレクションを別に構築しなければならないという議論は、国立国会図書館の長い歴史の中で、何回も繰り返されてきました。同時に、出版文化史的な観点から原装で保存するのが望ましい資料を、何らかの基準を設けて収集しようという試みも、予算や人手、スペースの問題から、長年の懸案とされてきました。

今回、当館がこの問題にささやかな一歩を踏み出すことができたのは、ひとえに日本書籍出版協会、日本印刷産業連合会をはじめとする関係各所のご理解とご協力の賜物であり、この場を借りて深く感謝申し上げます。

（総務部司書監　大塚（おおつか）　奈奈絵（ななえ））

2　http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/data/a5242.pdf

3　この貸出しを受けることができるものについて、「国立国会図書館展示会出品資料貸出規則」第２条において「国若しくは地方公共団体の機関又は社会教育若しくは学術研究の団体その他館長が特に公共的性格を有すると認める団体で、公共的性格を有する展示会を主催しようとするもの」と定められていますので、民間の団体の場合、社会教育・学術研究の団体でないときには、館長が特に公共的性格を有すると認めることが要件となっています。

4　http://rnavi.ndl.go.jp/kansai-kan/entry/post-37.php#original

ビッグデータ時代の図書館の挑戦

研究データの保存と共有

これまで図書館は、「文献」を収集し提供することで、学術研究活動の基盤となってきました。一方、近年、科学技術の進歩により膨大な情報（ビッグデータ）を収集・蓄積、共有することが可能となり、社会的にも様々に活用されるようになってきました。このような状況の中、図書館は、「文献」にとどまらず、その基となる「データ」に対してどのようなアプローチができるのでしょうか。

平成 26 年 2 月 5 日に国立国会図書館東京本館において国際シンポジウム「ビッグデータ時代の図書館の挑戦―研究データの保存と共有」を開催しました。ここではその講演や報告、討論のエッセンスを抽出して報告します。

「ビッグデータ時代の図書館の挑戦　―研究データの保存と共有」シンポジウムプログラム

【講演】「研究データをめぐる国際動向」

村山泰啓氏（情報通信研究機構（NICT）統合データシステム研究開発室長、京都大学生存圏研究所客員教授）

【基調講演】「ドイツ国立科学技術図書館の戦略：研究データの保存と共有」

ペーター・レーヴェ氏（ドイツ国立科学技術図書館（TIB）研究開発部門長、ドイツ地球科学研究センター客員調査員）

【国内事例報告】

木浦卓治氏（農業・食品産業技術総合研究機構 中央農業総合研究センター情報利用研究領域上席研究員）

佐藤博樹氏（東京大学大学院情報学環教授〔社会科学研究所兼務〕）

【鼎談】「研究データ・マネージメントの将来像：図書館ができること」

喜連川優氏（国立情報学研究所（NII）所長、東京大学生産技術研究所教授）

ペーター・レーヴェ氏

村山泰啓氏：モデレータ

【まとめ・質疑応答】

シンポジウムの資料等は国立国会図書館ホームページに掲載しています。
http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/tec/bigdata_sympo.html

科学の研究におけるビッグデータ

いわゆる「ビッグサイエンス」[1]における非常に大きな装置から発生する膨大なデータを多くの研究者が使うようになってきたこともあり、現代の科学は、実験している人よりもデータを前にして考えている人の方がはるかに多い時代になってきたと、喜連川優氏は語っています。

喜連川氏の研究室では、ウェブ、ブログ、ツイッターといったメディアで発信された情報を15年分ほど収集していて、そのデータからは、たとえば震災時に情報が伝播したパターンを読み取ることができるそうです。また、同研究室は、DIAS（地球環境情報統融合プログラム）[2]の基盤の構築にもかかわっており、そこから得られた大容量で多様な地球観測データからは、川の流量が予測でき、洪水を防ぐためにダムの放水量を管理する仕組みに役立てられています。いまやデータは、研究以外に、実社会の中でも様々な役割を果たすようになってきていると喜連川氏は言います。

喜連川優氏
NII 所長
東京大学生産技術研究所教授

研究データ共有化の重要性

研究データを共有する意義について、村山泰啓氏は、科学論文の信頼性担保のために、根拠となるデータを保存し共有する必要があると指摘します。地震や温暖化などの対策に欠かせない災害や気候変動のデータは、測定し直すことができない貴重なものです。また、ある研究[3]では、引用頻度の高い論文であっても、その根拠となるデータの損失のため、研究成果を再検証できないことが高い割合で発生することが指摘されています。科学の信頼性や発展に不可欠なデータを皆で共有して、再検証を保障する制度が科学の信頼のためにも社会のためにも重要、と村山氏は言います。

村山泰啓氏
NICT統合データシステム研究開発室長
京都大学生存圏研究所客員教授

さらに、社会科学分野のデータアーカイブ[4]について報告した佐藤博樹氏は、共有化のメリットとして、同じデータに基づいていても、異なる仮説を立てて議論できることや、大規模な研究費を使って作成された既存データに若手研究者がアクセスできることを挙げました。

佐藤博樹氏
東京大学大学院情報学環教授
〔社会科学研究所兼務〕

データに関する国際的な取り組み

国際科学会議（ICSU：International Council for Science）に2008年に設置された世界科学データシステム（WDS：World Data System）は、データの一般公開をポリシーに、その相互利用、長期保存を推進している組織です。村山氏が所属するNICTにはWDSの国際プログラムオフィスが置かれており、学術出版社や図書館等と連携してデータを出版する「データパブリケーション」（図1参照）事業などに取り組んでいます。

1　大きな資源を投入し大規模な設備で行う、巨額の資金を必要とする科学技術の共同研究プロジェクト。
2　http://www.editoria.u-tokyo.ac.jp/projects/dias/
3　C. Glenn Begley, Lee M. Ellis. Drug development: Raise standards for preclinical cancer research. *Nature* Vol.483.(29 March 2012). pp.531–533. doi:10.1038/483531a.
4　各種データを収集し、永続的に保存・蓄積すると共に、利活用できるよう整備して提供する仕組みをもつ組織・機関。

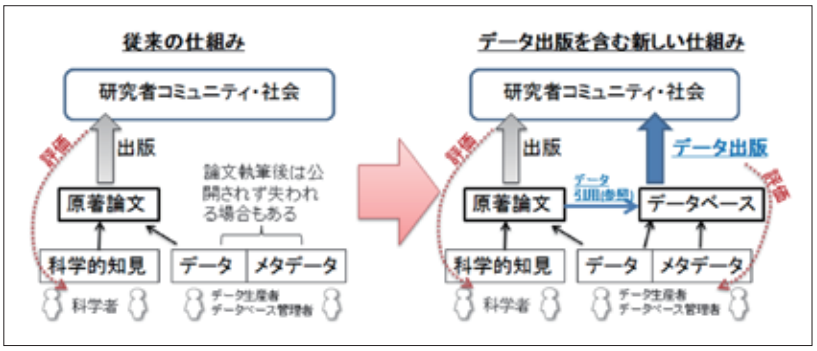


図1　データ出版の仕組み（地球電磁気・地球惑星圏学会. 地球電磁気学・地球惑星圏科学の現状と将来.2013.1,p.136）http://www.sgepss.org/sgepss/shorai/SGEPSS_syorai_Jan2013.pdf

また、研究データの共有を加速するためのコンソーシアムとして2013年に発足した研究データ同盟(RDA：Research Data Alliance)は、データの保存と共有に関して研究するワーキンググループを設け、国際会議を開催しています。村山氏によると、会議では、図書館情報学の専門家も重要な立場で活躍しているとのことでした。

ドイツ国立科学技術図書館（TIB）の挑戦

ペーター・レーヴェ氏
TIB 研究開発部門長
ドイツ地球科学研究センター
客員研究員

ドイツには国立図書館が複数あります。TIBはハノーファー大学の図書館であると同時に、科学技術分野の国立図書館としての役割も担っています。

ペーター・レーヴェ氏は基調講演の中で、研究活動は「実験」をして「データ」を取得することから始まり、そのデータを解析・解釈することで追跡可能な「情報」になり、その情報が「出版」されることでアクセス可能な知識になると説明しています（図2参照）。この一連の研究サイクルを機能させるためには、既存のデータアーカイブを強化し、持続可能な識別子を使う必要があると言います。論文や文献の識別子として、デジタルオブジェクト識別子（DOI：Digital Object Identifier）はよく知られていますが、科学データの識別にもDOIが用いられています。データがDOIを用いてリンクされると、URLを使ったリンクとは異なり、永続的なアクセスが可能となります。TIBは世界に先駆けてDOI登録機関としてその普及に取り組んできました。DOI登録活動の中心はDataCiteというコンソーシアムに移りましたが、今もTIBはその機能の一部を担って活動を続けています。

また、レーヴェ氏は、研究者が個人または組織の単一のハードディスクに保存している研究データのうち、一切公開されることのないデータが75%もあることを紹介した上で、これらのデータは失われているも同然であると指摘します。この割合を減らし、研究デー

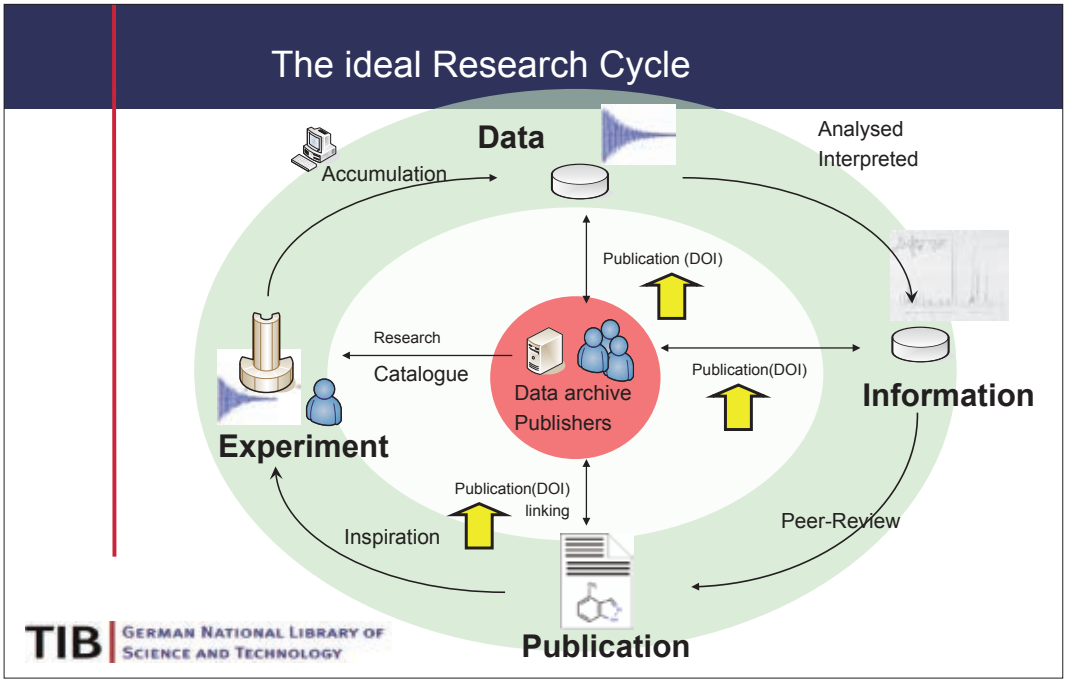


図2　研究データのサイクル（レーヴェ氏講演スライド p.24）
http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/tec/pdf/bigdata_sympo3.pdf

タの共有化を促進するため、TIBは、「研究データリポジトリ（RADAR：Research Data Repositorium）」というプロジェクトに取り組んでいます。RADARは、データマネージメント[5]を進めるのに必要な基盤や機能を提供するもので、研究機関、学術団体、図書館が関与しており、2013年度を初年度とする最大3か年のプロジェクトです。RADARでは、研究データの保存、研究データそのものの出版による公表、更には研究データとリンクした論文の発表の増加を目指しています。

国内でのデータ共有の現状とその課題

次に、日本国内の事例について見てみましょう。

まず、農業分野ですが、木浦卓治氏によると、統計データ、気象データ等の一部で共有化は進んでいるものの、ほとんどのデータは研究者を含む関係者の手元にあるそうです。農業機械にはデータ処理を定めたISO標準があり自動的にデータを記録する仕組みはありますが、機械や表示端末を提供している会社にだけ蓄積されていること、幾つかある農業クラウドサービスでも特定の会社のソフトウェア内でサービスが閉じており、別の会社のデータと互換性がないことなどが原因で、データの共有化は進んでいないと言います。

社会科学分野のデータ共有については、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター（SSJDA：Social Science Japan Data Archive）が、社会調査や世論調査、統計調査などから入手した個票データの収集・整理・提供をしています。佐藤氏は、SSJDAの運営にあたって、個々のデータで回答者が特定されないよう匿名化するマスキング作業、メタデータの作成、汎用的なソフトで利用可能にするためのデータ整理に労力がかかっていることを挙げ、データの整理及びレファレンスができる“データライブラリアン”の育成が課題であると訴えました。

質の高いデータの共有化に向けて

データの収集・蓄積を主体にするだけでなく、データをどう活かすかという点も重要です。データの活用にはIT、中でもデータのコード[6]は重要で、データ基盤を誰が作るかの検討に加えて、質の高いデータを残すためのコードの基準作りも考えていかなければならない、と喜連川氏は指摘します。佐藤氏は、データを公開することでデータの質が高まっていく効果があると指摘した上で、データアーカイブ側でデータの管理作業をする仕組みが必要と言います。第三者が使えるコードブック[7]の作成は科学研究費補助金に含まれず、研究者がボランティアで行っているという現状もあるそうです。

また、第三者も使えるようデータを整理し発信することは、多大な労力が必要になることから、多くの人々に利用されるデータを作成した研究者を高く評価する仕組みを作っていかなければならない、と喜連川氏は指摘しました。

データをめぐる図書館の役割と将来像

レーヴェ氏からは、今後のドイツ国内の科学のための将来構想を考える「小さな大根プロジェクト[8]」の紹介がありました。そこでは、2020年におけるドイツの研究データ基盤の要件について、図書館の在り方も含めた検討

木浦卓治氏
農業・食品産業技術総合研究機構
中央農業総合研究センター
情報利用研究領域上席研究員

5　データを収集・蓄積し、利活用するために必要な一連の作業を含む、データの品質管理。
6　データの記述を符号化・記号化して表現するためのルール。
7　データを利用するために必要なコードについて解説したもの。
8　Radieschen：Rahmenbedingungen einer disziplinübergreifenden Forschungsdateninfrastruktur（分野横断的な研究データ基盤の要件）

がなされているそうです。その中で、未来の図書館の役割について、「今日の科学出版者が担っている役割に取って代わり、イノベーションの創出に関与し、様々なところと連携した情報センターへと進化し、データサイエンティストを置き、データの品質管理や組織化、保存を行う機能も持つようになっている」と予測しています。

海外では、データの維持・管理作業全体が「データキュレーション」と呼ばれ、その専門家や専門機関があります。コードにはITの専門家が、データには各分野の専門家が必要ですが、データやコードの整理・体系化、レファレンスサービスについては、図書館員が専門家になりうる、と村山氏は言います。

喜連川氏は、研究データのためのデータセンターを国内に作っていく必要があることを訴え、図書館に対しては、従来の本を探すのと同じように、データの在りか、コードの在りかを探す支援機関としての期待が述べられました。

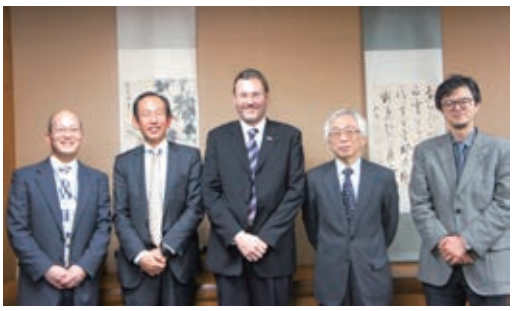
最後にレーヴェ氏は、先述した75%の失われゆくデータの存在は、これからも繰り返しデータが失われる可能性を示唆しており、持続可能なデータ基盤の構築を世界レベルで進めていきたい、と力説されました。

終わりに

学術情報の成果物である論文にとどまらず、その論文の根拠となるデータにもメタデータが付与されて、誰でもそのデータを検証できるような仕組みを構築することによって、新たな知の創造につながることがシンポジウムで示されました。そうした仕組みの実現に向けて、国立国会図書館はどのような役割を担えるのでしょうか。国立国会図書館では、東日本大震災に関する研究データを対象に、「ひなぎく」[9]を通じた研究データ保存・共有化に向けた検討に着手しています。挑戦は始まったばかりです。

（利用者サービス部・電子情報部）

9　国立国会図書館東日本大震災アーカイブ（愛称：ひなぎく）
http://kn.ndl.go.jp/



中高生への読書推進を考える　子ども読書連携フォーラムから

国際子ども図書館では、子どもの読書に関わる連携協力の促進を目指して、平成25年度から「子ども読書連携フォーラム」を開始しました。第1回目は“中高生への読書推進を考える”をテーマとして、公共図書館や学校図書館の担当者を中心に105名の参加を得て、平成26年3月3日に開催しました。

中学生・高校生への読書推進は、図書館にとって古くて新しい課題と言われています。今回はこのフォーラムの一部を紹介します。

中高生向けの読書推進活動の概況報告

最初に、国際子ども図書館から、世論調査等に基づく中高生の読書の現状を説明し、各図書館における中高生向け読書案内・読書相談サービスの概況について、参加者への事前アンケートの結果を基に報告しました。

2012年の「読書世論調査」[1]で、人生を変えた本が「ある」と答えた人のうち、最も多くの人が、「10代」（34％）で読んだと回答しました。思春期の中高生は、人生や生き方に影響を与えるような大切な1冊と出会える時期にあると言えます。

しかし、2013年「学校読書調査」[2]によれば、子どもたちの学年が上がるにつれて、1か月の読書冊数は減少します。小学4年生で13.5冊あった読書冊数は、中学1年生では5冊、高校3年生では1.35冊まで減り（いずれも男女平均値）、また1か月間に1冊も読まなかった「不読者」は、中学生の16.9％、高校生の45.0％を占めています。これらの数値は、「子どもの読書活動の推進に関する法律」が施行された2001年よりは減少していますが、中高生の読書状況はまだ改善の余地があると考えられます。

2012年に国立青少年教育振興機構が行った調査[3]によれば、中高生が本を読まない理由の第1位は「普段から読まない」、第2位は「読みたい本がなかった」でした。

「読みたい本がなかった」という不読者に対して、学校図書館や公共図書館が中高生と本とをつなぐ活動を効果的に行うことで、不読者を減らすことができると考えています。しかし、現在のところ、児童と成人との境界をまたぐ世代に対して、どのようなサービスが効果的であるかを模索している図書館が多いようです。フォーラム参加者に、中高生への取り組みについて事前アンケートで尋ねたところ、次のような取り組みと課題が挙げられました。これらを基に、当日のディスカッションや情報交換を行いました。

【取り組み事例】
- 中高生に向けた読書推進コーナーの配置や展示の工夫
- イベント企画から中高生や大学生に参加してもらう仕組み
- 中高生の感性を考慮した情報発信
- 公共図書館と学校図書館との情報交換

【課題】
- サービスが中高生のニーズに合っているか把握できない
- 中高生に適した本の選書が難しい
- 不読者層や、勉強や部活動などで時間のない中高生への働きかけの方法が分からない
- 公共図書館と学校図書館との、館種の枠を越えた連携が難しい

1　第66回読書世論調査（毎日新聞社，2012）『読書世論調査』2013年版 毎日新聞社東京本社広告局[編]　＜請求記号　Z45-55＞

2　第59回学校読書調査（全国学校図書館協議会・毎日新聞社，2013）『読書世論調査』2014年版 毎日新聞社東京本社広告局[編]　＜請求記号　Z45-55＞

3　子どもの読書活動の実態とその影響・効果に関する調査研究（国立青少年教育振興機構，2012）同報告書は、2013年に冊子体で刊行されたほか＜請求記号　UG31-L3＞、国立青少年教育振興機構のＨＰで公開されています。http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/72/

各館からの実践報告

次に、公共図書館と学校図書館から実践報告と、報告者によるパネルディスカッションを行いました。その概要をご紹介します。

広島県立図書館「図書部！！」

広島県立図書館「図書部」のポスター

広島県立図書館では、「読んで面白いと思った本を人に伝える」ことをテーマに、平成25年度から「図書部！！」活動を始めました。青少年にとって、同世代から本を薦められることは、読書を行うきっかけとして最も効果が高いことから、「伝える」手段を学ぶ機会を提供するとともに、実際に「伝える」実践を行い、そのプログラムや成果を、広く図書館や学校関係者に公開し、活動のモデルとなることを目指しています。参加者のうち3分の1の生徒は学校の先生からの声掛けがあって参加しました。

読書活動に関心がある中高生から大学生を対象に、本の紹介ポップ作成講座やビブリオバトル、熱血読書会などの部活動を行いました。

同学年が揃う学校とは異なり、公共図書館という場で、中学生から大学生という幅広い年齢層に対して読書をテーマにした交流の場を提供することは、読書の推進のみならず、進路や生き方について考えたり、人とのかかわり方を学ぶ場としても有意義であることがわかりました。また図書館職員が青少年の読書傾向や抱える課題を知る機会にもなりました。

必要な時に「読める」生徒を育てたい

東京都立狛江高等学校では、読書好きではなくとも、必要な時に本を読むことができる生徒を育てたいと考え活動しています。高校生は同世代の生徒の話に耳を傾けるので、本の紹介をし合える仕組みを作り、読書を可視化しています。特に図書委員会活動では、自分たちで学校図書館を作るという意識を持たせるようにして、イベントを企画しています。

また、教員と連携し、学習や特別活動とつながった読書活動を行っています。日々の学習や、本校生徒にとって目の前の課題であり関心の高い文化祭、交換留学、部活動などに関連する本の展示やブックリスト作成などの工夫で、生徒の幅広い興味関心に応えています。

しかし、それでもなお不読者層にどう働きかけるかという課題があります。不読者層とは、本を読むスキルを積み重ねてこなかった生徒たちのことではないか、と考えています。そのため、朝の読書時間「狛江タイム」に向けた学級文庫の設置や、ブックリストの作成をしたほか、オリエンテーション等を通じて「読み方」を学ぶ機会を設けました。また、気軽に読める本コーナーを作るなど、入りやすく話しかけやすい図書館づくりを工夫し、司書との継続的な関係から本を読む経験を積み重ねてもらえるよう試みています。

学校図書館は自立した学習者を育てる場

東京学芸大学附属世田谷中学校図書館では、日常的に生徒や教員に使われる図書館づくりをすると共に、授業での活用を支援しています。東京学芸大学学校図書館運営専門委員会が作成している「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース[4]」では、図書館を使った授業の事例を見ることができます。

選書では、「読み継がれた本」、「中学生にとっての旬の本」、「授業に役立つ本」、「様々な学問分野の面白さを伝えてくれる本」、という４つの指針を持ち、バランスよく収集するよう配慮しています。

また本を読まない子でも居心地が良い場、

4 http://www.u-gakugei.ac.jp/~schoolib/htdocs/

気軽にコミュニケーションがとれる場であれば、本を読むことへのハードルが下がると考えています。図書館は長い人生に必ず役に立つ頼もしい存在でありたい、そのためにも自立した学習者を育てる場になるよう、日々努力しています。

終わりに

第2部の参加者ディスカッションでは、事前アンケートにより共通の課題を持つ参加者ごとにグループ分けをしてディスカッションを行いました。さらに閉会後も参加者同士の熱心な話し合いが行われました。

フォーラム会場横のラウンジには、事前に募集した、子どもの読書推進に関する事例を紹介するポスター9点を展示しました。公共図書館・学校図書館等の活動を、工夫を凝らして紹介するポスターを熱心に見入る参加者の姿が見られました。

国際子ども図書館では、子どもの読書活動推進を目指して、立場や館種の異なる関係者が集まり相互交流できる場を今後も設けていきたいと考えています。

（国際子ども図書館児童サービス課）

ディスカッションの様子

ポスター展示

子ども読書連携フォーラム

日時　平成26年3月3日（月）13：00～16：00
場所　国際子ども図書館　3階ホール
内容
【第1部】
・中高生向けの読書推進活動の概況報告
　国際子ども図書館児童サービス課課長補佐　根岸輝美子
・各館からの実践報告とパネルディスカッション
　テーマ：中高生への読書案内・読書相談サービスを考える
　司会：青山学院女子短期大学教授　堀川照代氏
　パネリスト：広島県立図書館　今岡亜樹子氏
　　東京都立狛江高等学校　千田つばさ氏
　　東京学芸大学附属世田谷中学校　村上恭子氏
【第2部】参加者ディスカッション

当日の配布資料やパネルディスカッションの記録、ポスター展示は、国際子ども図書館ホームページに掲載しています。
http://www.kodomo.go.jp/study/cooperation/forum2/h25.html

01

02

03

04

世界図書館紀行

クアラルンプール

齊藤 まや

05

06

マレーシアの首都クアラルンプールは、東南アジア有数の大都市である。近年、急激に発展しているこの街は、東南アジアらしい熱気と人々の活気に満ちている。

2013年11月、筆者はクアラルンプールに滞在し、図書館事情を調査する機会を得た。本稿では、クアラルンプールの街並みと共に、筆者が訪問した図書館をご案内したい。

07

08

09

01. クアラルンプール駅(旧中央駅） **02.** クアラルンプール図書館内 **03.** マレーシア国立図書館 **04.** ペトロナス・ツインタワー **05.** LRT（高架鉄道） **06** 旧連邦事務局ビル **07.** 国立繊維博物館 **08.** マラヤ大学図書館内 **09.** マレーシア国立図書館にいた猫 **10.** ムルデカ・スクエア

10

クアラルンプールについて

クアラルンプールは、マレー半島の西側に位置する人口約180万人の大都市である。19世紀に、この地域を流れるクラン川とゴンバック川の合流地で錫が見つかり、錫鉱山の街として開拓されたことから発展してきた。この両河川の合流地を中心に発展したことから、この街は、マレー語で「泥が交わるところ」、すなわち「クアラルンプール」と名付けられた。その後、クアラルンプールは、19世紀末から英国による統治を受け、続いて1940年代に日本の統治下に入った。1945年の第二次世界大戦後に再び英国による統治を受けたが、1957年にマレーシアが英国から独立を果たして以降は、マレーシアの首都として機能している。

マレーシアは、多民族国家として知られる。首都クアラルンプールにおいても、マレー人、中国系の華人、タミル系インド人など様々な民族が共存している。民族と同様に宗教も多様であり、クアラルンプールでは、イスラム教のモスクであるマスジッド・ジャメ、ヒンドゥー教のスリ・マハ・マリアン寺院、華人たちが参拝する関帝廟が徒歩圏内に混在するが、これも多民族国家ならではの光景である。さらに、クアラルンプールには、イギリス統治時代の面影を残すコロニアル風建築物も多く残っており、より面白く複雑な街並みを作り出している。

様々な民族の文化が色濃く残るクアラルンプールであるが、近年は急激に近代化が進んでいる。モノレールやLRT（高架鉄道）などの交通整備が進み、市内の移動は飛躍的に便利になった。また、ブキッビンタンエリアやペトロナス・ツインタワーがあるKLCCエリアを中心に、大型ショッピングセンターや外資系のホテルが次々にオープンしており、国内外から買い物客を集めている。そして、現在もクアラルンプールは建設ラッシュに沸いている。今後、新しくできた近代的な街並みが、旧来の街並みとどのように融合していくのかが注目される。

このように、クアラルンプールは、「交わるところ」という名が示すとおり、複数の民族、文化、宗教、さらには新旧が交差する街となっている。この多様性こそが、クアラルンプールの魅力であると言えよう。

以下では、そんな多様性の街クアラルンプールにふさわしく、それぞれ異なったサービスを行う 3つの図書館を紹介したい。

01

02

05

06

03

04

01. マスジッド・ジャメ　02. スリ・マハ・マリアン寺院　03.関帝廟　04. KLセントラル駅を起点に市内を走るモノレール　05.06.クアラルンプールの街並み

マレーシア国立図書館

まずは、マレーシア唯一の国立図書館である。マレーシア国立図書館(Perpustakaan Negara Malaysia)は、ペトロナス・ツインタワーから約1km北方のラザク通り沿いに位置する。国立劇場、国立美術館、病院などが並ぶラザク通りにあって、その外観はひときわ目を引く。ユニークな屋根の模様は、タンコロ(tengkolok)と呼ばれる、マレー族の男性が着用する伝統的なターバンを模しているという。

マレーシア国立図書館の建物は、本館(Anjung Bestari)とPNMタワー(Menara PNM)の2つの建物からなる。ユニークな外観を持つのが本館で、国内外刊行の児童資料、国外の刊行物、電子資料、ASEANコレクションなどの閲覧室を配置する。本館には、研究個室、カフェテリア、展望室などの施設もある。建物の中心部には吹き抜けがあって開放的な空間となっており、1階のホールでは、マレーシアの歴史や文化に関する常設のパネル展示を実施している。

一方、PNMタワーは15階建ての建物で、6階から11階が閲覧スペース、12階から15階が職員のオフィス、地下1階から地上5階が駐車場となっている。閲覧スペースでは、ジャウィ文字というマレーシア独自の文字で書かれたマラヤ文書のコレクション、マレーシア国内刊行の図書、逐次刊行物、地図、政府出版物などの閲覧室を配置する。

マレーシア国立図書館外観

PNMタワーでは資料展示会を開催しており、1年に3～4回展示替えが行われる。筆者の訪問時は、特色あるマラヤ文書コレクションの中でも、選りすぐりの貴重書を紹介する展示会を開催していた。展示をする際は、マレー文化の保護と普及を意識した展示構成にしているという。

マレーシア国立図書館は400万点以上の資料を所蔵する。これは、マレーシア最大であり、東南アジア全体においても、シンガポール国立図書館に次ぐ所蔵規模である。マレーシアにも、日本と同様に法定納本制度があり、マレーシア国立図書館は、図書館資料納本法(Deposit of Library Material Act)が定める法定納本機関として、国内の出版物を網羅的に収集している。近年では、この納本制度によるものだけでも、年間1万数千点のペースで、資料を収集しているという。

マレーシア国立図書館の利用には利用者登録が必要であるが、マレーシア国籍の有無にかかわらず、誰でも無料で登録することができる。登録すると、閲覧、複写、レファレンスなどのサービスを利用できるほか、参考図書や貴重書など一部の資料を除く図書館資料を、1回につき3冊まで3週間の期限で借りることができる。また、館内の端末からのデジタル資料へのアクセスや、研究個室などの図書館設備の利用も可能となる。

近年、マレーシア国立図書館ではデジタル化に対応した設備作りをしている。館内全域で無料のインターネット無線LANを提供するほか、本館には端末44台を配置するハイパーメディアセンターを設置し、契約する有料データベースや同館がデジタル化した資料を利用に供している。

資料デジタル化についても積極的で、マラヤ文書などの貴重資料を中心にデジタル化を実施している。2013年10月時点で、マラヤ文書約18万ページ、貴重図書約26万ページ

など、合計約80万ページのデジタル化を完了しており、更に年間約15万ページのペースでデジタル化を進めているという。残念ながら、デジタル化資料のほとんどは館内限定公開で、日本からアクセスすることはできない。デジタル化資料には、海外の研究者にとっても有用な資料が多く含まれるので、今後、館外にも公開されることを期待したい。

そのほか、マレーシア国立図書館の取り組みでは、"Digital Initiatives"というプロジェクトも注目される。これは、電子展示会、国民の関心が高いテーマに関する情報源などのコンテンツを収録する情報発信サイトで、同館ウェブサイト内の"List of Digital Initiative Websites"[1]からアクセス可能である。ここでは、収録コンテンツの中から、「国民の関心が高いテーマ」として提供される、「津波災害(Bencana Tsunami)」[2]を紹介したい。

このコンテンツは、津波の発生メカニズムや、過去に東南アジア地域で発生した津波被害の歴史、2004年12月に発生したスマトラ沖地震の津波被害に関する写真や映像などを収録している。写真や映像の中には、津波によって損壊した建物の様子など、生々しい被害の跡が撮影されているものもある。

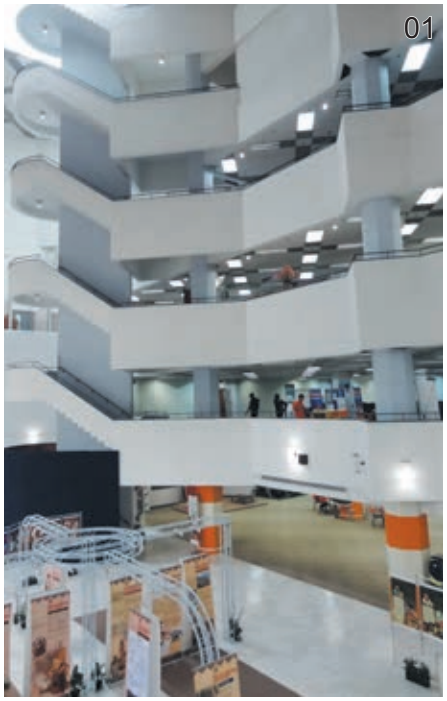
津波災害(Bencana Tsunami)ウェブサイト

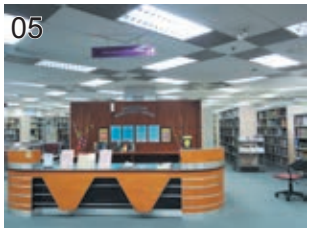
近年、マレーシアでは大規模な地震が発生しておらず、国民の防災意識が薄くなっているという。2004年のスマトラ沖地震では、近隣諸国において津波による甚大な被害が発生した。マレーシアでの被害は比較的軽かったものの、マレーシア国立図書館は、この地震を機に、災害の危険性と防災の重要性を国民に呼びかけるためにこのサイトを立ち上げたのだという。

このように、マレーシア国立図書館は電子図書館サービスを積極的に推進しており、資料デジタル化の範囲の拡大や、更に国民にとって有益な情報を提供するためのコンテンツ作りも目指しているとのことで、今後の動向が注目される。

1 http://www.pnm.gov.my/en/main.php?Content=vertsections&VertSectionID=5&lID=

2 http://tsunami.pnm.my/





01. マレーシア国立図書館本館の吹き抜け　02.03. 資料展示会の様子　04. ジャウィ文字で書かれたマラヤ文書　05. レファレンスカウンター　06. PNMタワー内閲覧室

クアラルンプール図書館

続いて、クアラルンプールの公立図書館を紹介したい。クアラルンプールには市立図書館が9館ある。その9館の中央館として、資料収集と書誌作成を一手に担うのが、クアラルンプール図書館(Perpustakaan Kuala Lumpur)である。

クアラルンプール図書館には、LRTのマスジッド・ジャメ駅からアクセスできる。駅を降り、川沿いにあるマスジッド・ジャメの横を通過して前方に進むと、広大な「ムルデカ・スクエア(独立広場)」が見えてくる。その広場の傍らにあるのがクアラルンプール図書館である。周囲には、ムルデカ・スクエアのほか、旧連邦事務局ビルを始めとするコロニアル風の建築物、雑貨店が密集するセントラルマーケット、華人たちが集うチャイナタウンなどの観光スポットが集まっているため、連日多くの観光客でにぎわっている。

アーチ状のカーブを描く、コロニアル風の美しいクアラルンプール図書館の外観は、こうした特色ある街並みの中にあっても、周囲に埋もれることなく存在感を示している。図書館は3階建ての建物で、図書、雑誌の閲覧室、音楽・映像資料室、小ホール、ミーティングルームなどの設備がある。ムルデカ・スクエア側の壁面には大きな窓を配しており、ムルデカ・スクエアを見下ろす明るい空間で読書を楽しむことができる。そのため、観光客が立ち寄ることも多いという。また、児童サービスにも力を入れており、隣接する児童館では児童書を所蔵している。

クアラルンプール図書館は、入館や資料閲覧は誰でも可能だが、資料の貸出には図書館カードが必要である。図書館カードを作成できるのは、クアラルンプールとその近郊の住民のみであり、登録料と年会費が必要である。21歳以上の成人の場合、登録料は150リンギット(約4,700円)、年会費は10リンギット(約310円)である。図書の貸出期限は2週間で、期限を過ぎても返却しない場合、超過日数に応じて罰金を支払わなければならない。

クアラルンプール図書館の所蔵資料は、ほとんどがマレー語や英語の資料である。市民の要求に広く応えるため、1年に6回選書会議が開催され、分野ごとに偏りがないように資料を収集しているという。市民向けの一般的な図書、雑誌、新聞のほか、市の中央図書館として、クアラルンプールの行政機関等の刊行物を網羅的に収集している。また、クアラルンプールの歴史や文化を理解するための資料を重視しており、前述の行政機関刊行物のほか、文書類、クアラルンプールに関する

01. ムルデカ・スクエアに面して建つ旧連邦事務局ビル　02. セントラル・マーケット　03. チャイナタウン

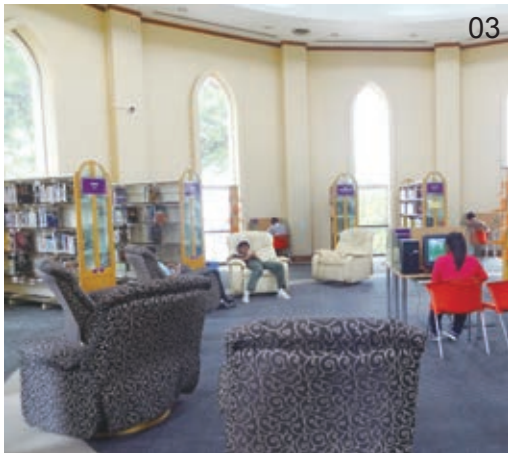
研究書、写真、新聞記事などを重点的に収集し、「クアラルンプール特別コレクション」を構築している。

近年のクアラルンプール図書館の活動で注目されるのは、"u-Pustaka"プロジェクトである。これは、公共図書館の機能とサービスを強化するため、複数の図書館が共同で実施するプロジェクトであり、クアラルンプール図書館はその中で中心的役割を果たしている。現在、このプロジェクトには、マレーシア国内の7つの公共図書館が加盟しており、オンラインレファレンスなどの各種オンラインサービス、統合所蔵検索システムの構築、相互貸借などを実施している。

このプロジェクトでは、メンバー登録すると様々なサービスが利用できるようになる。メンバーには2つの種別があり、どちらも無料である。そのうち、国籍を問わず誰でも登録可能な"オンラインメンバー"になると、ポータルサイト"Portal u-Pustaka"[3]で、オンラインサービスの利用が可能になる。さらに、マレーシア国籍またはマレーシアの永久在住権を持つ者のみが登録できる"u-Pustakaメンバー"になると、資料を自宅まで宅配してくれる有料の貸出しサービスを、オンラインで申し込むこともできる。宅配された資料は、有料で郵送返却できるほか、プロジェクト加盟館のカウンターおよび市内各所に設置されたu-Pustaka図書返却ステーション（右写真）に持参すれば、無料で返却できる。このような、「全国どこからでも資料にアクセスできる」サービスの実践は、日本の図書館界から見ても参考になる部分もあり、今後の展開に注目したい。

3 http://www.u-library.gov.my/

01. クアラルンプール図書館外観　02. 図書館内部の様子　03. 音楽・映像資料室はソファが配置され、休憩を取る学生の姿もある　04. クアラルンプール図書館児童館



マラヤ大学図書館

最後に、クアラルンプールの大学図書館を紹介したい。クアラルンプールの玄関口であり、有名なマレー鉄道の停車駅でもあるKLセントラル駅から、LRTのクラナ・ジャヤ線で西部のクラナ・ジャヤ方面に4駅乗車すると、ユニベルシティ駅に到着する。市街地を少し離れた静かな駅から15分程歩くと、マラヤ大学の広大なキャンパスがある。マラヤ大学は1905年にマレーシアで初めて設立された大学で、2万人以上の学生が在籍する総合大学である。

学内には、中央図書館のほか、東アジア研究図書館やイスラム研究図書館など12の専門図書館がある。今回、その中で筆者が訪問したのは中央図書館である。中央図書館は、マラヤ大学の全学生を対象に閲覧やレファレンスサービスを行うほか、マラヤ大学内全ての図書館の資料収集、サービス、システム構築等の統括も担う。

中央図書館は、キャンパスの中心部近くにある4階建ての建物である。参考図書類、雑誌、学位論文などを提供するほか、メディアセンターや53室の研究個室（うち21室は視覚障害者対応機器がある）や歓談のためのラウンジなどを設置する。中央館の座席数は1,608席であるが、筆者が訪れた平日の午後には、授業を終えた学生たちで座席のほとんどが埋まっていた。こうした熱心な学生の学業を支えるため、中央図書館の1階にはレファレンス専用カウンターがある。このカウンターには、利用者サービス部門のレファレンス・ライブラリアンが常駐し、文献検索の相談を受け付けている。

マラヤ大学図書館の注目すべき取り組みとしては、特色ある所蔵資料や大学の研究成果を広めるために構築しているオープンソースのリポジトリ"Digital@UM(Digital Archives and Repositories)"[4]が挙げられる。このリポジトリは、学術関係の8つのコンテンツを収録する。たとえば、"Students' Repository"は、マラヤ大学に提出された学位論文など約3,500件を収録し、"My Manuskrip"は、同館がデジタル化した179タイトルのマラヤ文書の画像を公開する。これらのコンテンツに収録される情報のほとんどは、外部からもアクセス可能である。マラヤ大学図書館は、更に広くコンテンツの利用を促すため、複数の機関によるコンテンツの共同利用を目指す"PERPUN"プロジェクトに参加している。現在、このプロジェクトには大学図書館など26機関が加盟している。プロジェクトのポータルサイト"My UniNet"[5]は、各機関の所蔵資料やデジタルコンテンツの一部について統合検索が可能であり、将来的には全面的な相互利用の実現も目指しているという。このプロジェクトが進展すれば、学術情報のさらなる円滑な流通が期待できる。

4 http://www.umlib.um.edu.my/contents.asp?tid=33&vw=en

5 http://perpun.upm.edu.my/

01. マラヤ大学中央図書館外観　02. 03. 図書館内

おわりに

以上、クアラルンプールの街並みとそれぞれ異なる特徴を持つ3つの主要な図書館をご紹介した。1年を通して最高気温が30度を超える熱帯の都市クアラルンプールにあって、筆者が訪問した図書館は、いずれも最新設備を備えた快適な空間を提供していた。休憩・展望スペースの設置や、誰でも楽しめる展示会の実施など、単なる所蔵資料の利用空間にとどまらないサービスを行う図書館もある。クアラルンプールを訪れる機会があれば、観光や買い物だけでなく、図書館にも足を延ばしてみてはいかがだろうか。

（さいとう　まや　関西館アジア情報課）

書誌データの品質管理

書誌データとは、図書や雑誌のタイトル、著者、出版年、大きさなどの特徴を記録し、他のものと区別できるようにする情報のことです。国立国会図書館では、受け入れた資料の書誌データを作成し、インターネットなどを通じて提供しています。データ作成・提供の迅速さを追求しつつ、より正確で信頼性のある書誌データを提供するため、書誌データの品質管理をしているのが、収集・書誌調整課書誌サービス係です。

さて、読者の皆さんは国立国会図書館で１年間に作成・更新される書誌データの件数は何件ぐらいだと思いますか？ 実は約65万件にもなります。書誌サービス係では、そのうち、主に「全国書誌」収録対象のデータの品質管理を行っています。全国書誌とは、国立国会図書館が収集・整理した国内出版物および外国刊行日本語出版物について、標準的な書誌情報を、国立国会図書館サーチやNDL-OPACを通じて、広く国の内外に速報するものです。作成された書誌データを１週間分ずつ抽出し、作成ルールに則っているか、項目のもれがないか、正しい記号を使っているか、コード値が正しいか等を、プログラムを使ってチェックし、人間の目による点検では見つけにくいエラーを見つけて修正します。

また、書誌サービス係は、国立国会図書館で所蔵する膨大な資料の書誌データに関する問い合わせ窓口でもあります。「タイトルの漢字が違うのでは？」「著者の読みが間違っています」といった書誌データの誤りを知らせてくださるものから、「書誌データはダウンロードできますか？」といった書誌データの利用に関するものまで、さまざまな問い合わせが、毎日のように寄せられます。書誌サービス係をはじめ、関係する課で分担して回答します。書誌データは、その作成された年代によって記録のルールが大きく異なっていたり、入力できる文字に制約があるなどシステム環境に左右される部分が多かったりもします。そのため、確認に苦労することもありますが、書誌データの品質向上につながりますので、大変ありがたく思いながら日々回答しています。

これからも、書誌データの品質管理をしっかり行うとともに、このように手間をかけて品質を高めた書誌データを活用していただくための取り組みにもさらに力を入れていきたいと思います。

（収集・書誌調整課書誌サービス係　ダックス）

本屋にない本

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、
日本国内の出版物を広く収集しています。
ここでは、主として取次店を通さない
国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

帝国劇場 100 年のあゆみ
1911-2011

『帝国劇場 100 年のあゆみ』編纂委員会 , 東宝株式会社総務部 編
東宝 刊　2012.12　335p　31cm　　＜請求記号　KD11-L2＞

昨年、映画でも大ヒットを記録したミュージカル『レ・ミゼラブル』が初めて帝国劇場にお目見えしたのは、昭和 62 年のことです。日本の舞台界にとって初めてづくしであったこの作品は、俳優陣の演技力、作品そのものの持つ高いテーマ性に支えられ、大成功のうちに幕を閉じました。以来四半世紀、帝国劇場は「ミュージカル百花繚乱」の時代を迎えます。

しかし、帝国劇場が初めからミュージカルの殿堂であったわけではありません。そこには波乱万丈の歴史がありました。本書は、帝国劇場 100 年の歴史を膨大な上演記録と写真資料で振り返る、編年体の記録集です。

本書は 6 章からなります。第 1 章は明治 44 年の帝国劇場誕生から関東大震災まで。当時諸外国では、国賓を迎えるにあたってその国の演劇を見せることが一般的でした。近代国家の仲間入りを目指し、日本でも国立劇場の設立が求められますが、国主導の計画は進まず、ついに、民間施設でありながら国立劇場の役割をも担うことになる帝国劇場が誕生しました。

第 2 章から第 4 章では帝国劇場のあり方が大きく揺れ動くさまが描かれます。関東大震災からの復興と経営悪化、そして昭和 6 年には松竹の経営のもと、映画封切専門館へ転向することで生き残りの道を探ります。昭和 15 年に演劇劇場としての再起を図りますが、戦時下に劇場は閉鎖。終戦後はすぐに再開場を果たし、宝塚歌劇団公演や「帝劇ミュージカルス」、歌舞伎などを幅広く上演するものの、昭和 29 年のバレエ公演を最後に、帝国劇場は演劇劇場としての幕を再び閉じることとなります。昭和 30 年代には、帝国劇場は巨大なスクリーンに映画を映写するシネラマ館として運営されました。

ここまでの紆余曲折の物語も面白いのですが、本書のいちばんの見どころは、第 5、6 章「新帝国劇場」時代でしょう。昭和 39 年にシネラマ上映が終了し、世界屈指の舞台機構を備えた新帝国劇場の建設が開始。帝国劇場は新たな時代の演劇劇場として再生します。

第 5 章、昭和 40 年以降は、各演目の公演期間、キャスト等に加えて演目解説が付され、写真資料も豊富になります。『屋根の上のヴァイオリン弾き』『ラ・マンチャの男』など、今も繰り返し上演され続ける名作が初めて上演されたのもこの時期です。『レ・ミゼラブル』上演の昭和 62 年から始まる第 6 章は、写真がカラーになり、名作の一場面一場面が読む人の胸に鮮やかによみがえります。

本書は、「後世の芸術家・研究者に資する」目的で編纂されたそうですが、読み物としても面白く書かれています。波乱に満ちた劇場の歴史と、そこで上演された幾多の物語。ページをめくっていると、時が経つのを忘れてしまう一冊です。

（利用者サービス部人文課　都筑（つづき）　志麻（しま））

※非売品。国立国会図書館、松竹大谷図書館、千代田区立日比谷文化図書館等で閲覧可能。

お知らせ

全国書誌（電子書籍・電子雑誌編）の提供開始

4月から、全国書誌（電子書籍・電子雑誌編）の提供を開始しました。

全国書誌（電子書籍・電子雑誌編）は、平成25年7月1日以降に当館が収集したインターネット等で出版（公開）される電子書籍・電子雑誌のメタデータを収録しています。以下のページからご利用いただけます。

国立国会図書館ホームページ(http://www.ndl.go.jp/)＞国立国会図書館について＞書誌データの作成および提供＞書誌情報提供サービス＞全国書誌データ提供

URL　http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/jnb.html

電子書籍・電子雑誌の収集については、次のページをご覧ください。

○オンライン資料収集制度（eデポ）

URL　http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/online_data.html

○インターネット資料の収集

URL　http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/internet_data.html

平成26年度の図書館員を対象とする研修

平成26年度に国立国会図書館が実施する、図書館員を対象とする研修の予定をお知らせします。

本年度は、前回実施時に高い評価を受けた研修に加え、新たに「書誌データ利活用説明会」を実施します。皆様からのお申込みをお待ちしています。

■本年度の研修について

○書誌データ利活用説明会：書誌データの利活用方法に関する実演、事例紹介等を行う予定です。

○資料デジタル化研修：デジタル化資料の提供、利活用等について、講義等を行う予定です。

○資料保存研修：資料保存に関する基礎的な知識と技術の習得を目指します。

○児童文学連続講座：総合テーマを「児童文学とそのマルチメディア化」とする予定です。

○科学技術情報研修：科学技術分野のレファレンスの考え方および専門資料群について、講義と演習を行う予定です。

○障害者サービス担当職員向け講座：図書館における障害者サービスの基礎的な知識の習得を目指します。

○レファレンス研修：レファレンスサービスについての理論や、事例に則したレファレンスの考え方について、講義等を行う予定です。

○日本古典籍講習会：日本の古典籍の目録および環境の整備を図るために、書誌学の専門知識や整理方法の技術の修得を目指します。

○法令・議会・官庁資料研修：法令、議会、官庁資料の調べ方について、講義と演習を行う予定です。

○アジア情報研修：アジアに関する情報の調べ方について、講義と演習を行う予定です。

■各研修の詳細・申込方法

各研修の実施日程や科目の詳細・申込方法などについては、決まり次第、国立国会図書館ホームページ（http://www.ndl.go.jp/）＞図書館員の方へ＞図書館員の研修（http://www.ndl.go.jp/jp/library/training/index.html）に掲載します。メールマガジン『図書館協力ニュース』でも、随時研修の案内をしています。未登録の図書館、関心のある図書館員の方はぜひご登録ください。次のURLから登録できます。

図書館員の方へ＞図書館へのお知らせ＞メールマガジン『図書館協力ニュース』

URL　http://www.ndl.go.jp/jp/library/library_news_toroku.html

※このほか、公共図書館、大学図書館などでレファレンス業務に関する研修を実施する際に、職員を講師として派遣します。また、インターネットを通じて受講できる遠隔研修を実施します。
詳細は、ホームページ「図書館員の研修」などでお知らせします。

平成26年度研修一覧

研修名	実施時期（予定）／会場	対象および定員
書誌データ利活用説明会	平成26年7月25日（1日間）／東京本館、8月22日（1日間）／関西館	主に学校図書館、公共図書館等の職員。各30名。
資料デジタル化研修	平成26年10月（2日間）／関西館	公共図書館の職員等で資料デジタル化に関する業務を担当する者。24名。
資料保存研修	平成26年10月～11月（各1日間）／東京本館（2回）・関西館（1回）	公共図書館職員、大学図書館職員および専門図書館職員。東京本館各21名・関西館16名。
児童文学連続講座 -国際子ども図書館所蔵資料を使って	平成26年11月（2日間）／国際子ども図書館	現在、図書館等において児童サービスに従事する者。60名。
科学技術情報研修	平成26年11月（2日間）／関西館	公共図書館職員、大学図書館職員および専門図書館職員。32名。
障害者サービス担当職員向け講座（日本図書館協会と共催）	平成26年11月（3日間）／関西館等	公共図書館職員および大学図書館職員等。30名。
レファレンス研修	平成26年12月（2日間）／東京本館	公共図書館職員、大学図書館職員または専門図書館職員で、現在レファレンス業務を担当する者。レファレンス業務経験5年以上。24名。
日本古典籍講習会（国文学研究資料館と共催）	平成27年1月（4日間）／国文学研究資料館・東京本館	日本の古典籍を所蔵する機関の職員で、現在古典籍を扱っている者。経験年数おおむね3年以内。32名。
法令・議会・官庁資料研修	未定(2日間）／東京本館	公共図書館職員、大学図書館職員、専門図書館職員および地方議会図書室の職員等。30名。
アジア情報研修	未定(1日間）／関西館	公共図書館職員、大学図書館職員、専門図書館職員および調査研究機関職員等。30名。

次の研修は、各事業の参加館を対象として実施するものです。

レファレンス協同データベース事業担当者研修会	平成26年6月11日（1日間）／関西館、6月24日（1日間）／東京本館	レファレンス協同データベース事業参加館の実務担当者。各30名。
国立国会図書館総合目録ネットワーク研修会	平成26年6月18日（1日間）／東京本館・関西館（TV中継）	都道府県立および政令指定都市立図書館中央館における国立国会図書館総合目録ネットワーク事業担当者等。東京本館30名・関西館24名。

利用者アンケート ご協力のお願い

国立国会図書館が提供する各種のサービスを改善するために、次のとおりアンケートを実施します。

■国立国会図書館ホームページアンケート

国立国会図書館ホームページを利用されている方々を対象としたアンケートです。あわせて、当館ホームページから利用できる各コンテンツについてのアンケートも実施します。皆様のご意見をお聞かせください。

○アンケートページ　URL　http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/enquete.html
国立国会図書館ホームページ（http://www.ndl.go.jp/）
＞国立国会図書館について＞利用者アンケート
○実施期間　6月23日（月）～9月26日（金）

■図書館アンケート

国内の図書館等を対象としたアンケートです。「登録利用者制度」もしくは「図書館及び関連組織のための国際標準識別子（ISIL）」に登録している図書館等のうち、約1,200館に対して、7月に調査票をお送りする予定です。ご協力をお願いいたします。

○問合せ先
国立国会図書館　総務部　企画課　評価係
電子メール　hyoka@ndl.go.jp

中高生のための「国立国会図書館の仕事」紹介

国際子ども図書館では、中学生・高校生のために、国立国会図書館の仕事を紹介するイベントを開催します。国立国会図書館で働く職員が自分の仕事を説明し、参加者からの質問に答えます。会場は、中学生向けプログラムが国際子ども図書館（上野）、高校生向けプログラムが国立国会図書館東京本館（永田町）となります。

（昨年の中学生向けプログラムの様子）

○日時と内容　7月23日（水）13：00～16：00
中学生向けプログラム：国際子ども図書館の仕事
～「世界の児童書を集める仕事」と
「子どもに本の楽しさを伝える仕事」～
＊国際子ども図書館の見学を含む。
7月30日（水）13：00～16：00
高校生向けプログラム：国立国会図書館の仕事
～「国会議員のための調査の仕事」と
「本や雑誌を集める仕事」～
＊国立国会図書館東京本館の見学を含む。

○会　　場　（中学生向け）国際子ども図書館　3階ホール
（高校生向け）国立国会図書館　東京本館　3階セミナールーム

○対　　象　中学生・高校生

○定　　員　各日とも25名程度（先着順）

○申込方法　国際子ども図書館HPのイベントページをご確認の上、電子メールでお申し込みください。
国際子ども図書館ホームページ（http://www.kodomo.go.jp/）
＞ 展示会・イベント＞イベント情報＞これからのイベント＞
2014夏休み講座「中高生のための『国立国会図書館の仕事』紹介」
URL　http://www.kodomo.go.jp/event/event/event2014-06.html

○問合せ先
国立国会図書館 国際子ども図書館 児童サービス課 企画推進係
電子メール　oshigoto@ndl.go.jp　　電話　03（3827）2053（代表）

国際子ども図書館 夏休みイベント「科学あそび2014」

国際子ども図書館では、講師に科学読物研究会の原田佐和子氏をお招きし、科学と科学の本に対する子どもたちの興味を引き出すイベント「科学あそび2014」を開催します。

（昨年の様子）
「見えない音をたしかめよう
～音の実験～」をテーマに実施

○日　　時　7月26日（土）　14：00～16：00
　　7月27日（日）　14：00～16：00
○内　　容　のびてちぢむだけじゃない！～実験で広がるゴムの世界～
○会　　場　国際子ども図書館　3階ホール
○講　　師　原田 佐和子 氏（科学読物研究会）
○対　　象　小学生
○定　　員　各日とも40名程度
○参 加 費　無料
○申 込 方 法

次のいずれかの方法でお申し込みください（7月8日（火）必着）。
申込み多数の場合は抽選とさせていただきます。

［往復はがき］

〒110-0007　東京都台東区上野公園12-49
国際子ども図書館「科学あそび2014」係
参加者1名につき1通に、本人（子ども）の氏名（ふりがな）、学年、電話番号、希望日（両日とも参加可能な場合は優先順位を記載）を明記の上、お申し込みください。返信用はがきには、返信先の郵便番号、住所、氏名を記入してください。

［ホームページ］

「科学あそび2014」のページの「参加申込みフォーム」からお申し込みください。
国際子ども図書館ホームページ（http://www.kodomo.go.jp/）＞展示会・イベント＞イベント情報＞これからのイベント＞科学あそび2014
URL　http://www.kodomo.go.jp/event/event/event2014-07.html

○問 合 せ 先

国立国会図書館 国際子ども図書館 児童サービス課 児童サービス係
電話　03（3827）2053（代表）

※両日は、通常の「子どものためのおはなし会」はお休みします。

国際子ども図書館電子展示会「中高生のための幕末・明治の日本の歴史事典」提供開始

国際子ども図書館の電子展示会「中高生のための幕末･明治の日本の歴史事典」の提供を6月20日から開始します。

この電子展示会は、中高生が楽しみながら日本の近代史を学べるよう、幕末・明治の日本の歴史を、事典形式で紹介するインターネット上の展示会です。国際子ども図書館所蔵の児童書を含む、国立国会図書館ならではの貴重な資料を使用しています。

「大日本帝国憲法」の草案などの史料画像にわかりやすい解説をつけた「史料編」（5項目）、坂本竜馬などの人物の肖像と、エピソード、関連する本を紹介した「人物編」（26人）、「ペリー来航」などのテーマに関連した画像とミニ解説をセットにしてスライドで見せる「テーマ解説」（14項目）で構成されています。ほかにも、史料入門、クイズ、錦絵ギャラリー、年表、索引などがあります。

興味を持ったひとつの事項や人物から、次々とリンクをたどって知識を広げていける内容となっています。

○URL　http://www.kodomo.go.jp/yareki/

国立国会図書館ホームページ（http://www.ndl.go.jp/）＞電子展示会

＞中高生のための幕末・明治の日本の歴史事典

または

国際子ども図書館ホームページ（http://www.kodomo.go.jp/）＞展示会・イベント＞電子展示会＞中高生のための幕末・明治の日本の歴史事典

○問合せ先

国立国会図書館 国際子ども図書館 児童サービス課

電話　03（3827）2053（代表）

■ 電子展示会「ブラジル移民の100年」をリニューアル公開

国立国会図書館は、5月30日（金）から、ホームページ上の電子展示会「ブラジル移民の100年」をリニューアル公開しました。

国立国会図書館では、昭和59（1984）年から、ブラジル、ペルー、ハワイ等、各国に職員を派遣し、日系移民に関する資料の収集を行ってきました。これらのなかには日記・手紙・メモ・写真・各種印刷物等の文書類、現地刊行の日本語図書・新聞・雑誌等、貴重な資料が含まれています。

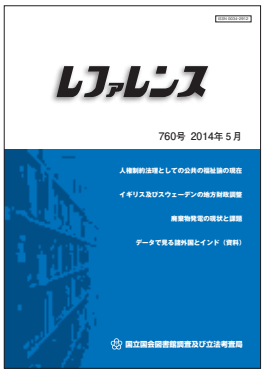
平成21年3月4日に提供を開始した「ブラジル移民の100年」（日本語およびポルトガル語）では、主に移民を送り出した日本側から見たブラジル移民の歴史を、上記の当館所蔵資料を中心にご紹介しています。また、展示は、画像とともに、多くの資料をテキスト化して掲載しています。

今回のリニューアルでは、英語版を追加したほか、これまでポルトガル語訳のなかったコラム（「アマゾンに闘いを挑んだ無敗のコンデ・コマ」「ブラジル日本移民と俳句」）のポルトガル語訳を追加しています。

本展示会が、さらに多くの方々にブラジル移民の歴史について理解を深めていただくきっかけとなれば幸いです。

○URL　http://www.ndl.go.jp/brasil/

■ 新刊案内 国立国会図書館の編集・刊行物



レファレンス　760号　A4　90頁　月刊　1,080円　発売　日本図書館協会

人権制約法理としての公共の福祉論の現在―最高裁判決における近時の展開を踏まえて―

イギリス及びスウェーデンの地方財政調整―近年の改革を巡って―

廃棄物発電の現状と課題

データで見る諸外国とインド―米・中・周辺国との関係―（資料）

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033　東京都中央区新川1-11-14　電話　03（3523）0812

NATIONAL DIET LIBRARY MONTHLY BULLETIN

No.639 6 June 2014

CONTENTS

02 <Book of the month - from NDL collections>
Haiyū gakuya sugoroku : The fun of virtual backstage visit

04 Preservation and transmission of culture of publishing and bookbinding : Book Design & Binding Contest and importance of preserving original bookbindings

10 Preserving original bookbindings of book collection

12 Libraries in the "Big Data" era : Strategies and Challenges in Archiving and Sharing Research data

17 Promotion of reading for teens : Forum for cooperation on children's reading

20 Travel writing on world libraries : Kuala Lumpur

27 <Tidbits of information on NDL>
Quality control of bibliographic data

28 <Books not commercially available>
○ *Teikoku gekijō 100nen no ayumi : 1911-2011*

29 <Announcements>
○ Japanese National Bibliography records of e-books and e-magazines now available
○ Training programs for librarians in FY2014
○ Call for participation in the user questionnaire survey
○ National Diet Library career education: Seminar for teens "Working in the National Diet Library"
○ Summer event at the International Library of Children's Literature "Fun with science 2014"
○ Digital exhibition "Teenagers' encyclopedia of the history of Japan during the late Edo and Meiji periods" now available
○ Renewal of Digital exhibition "100 years of Japanese emigration to Brazil"
○ Book notice - Publications from NDL

国立国会図書館月報

発行所 国立国会図書館
編集責任者 小寺正一
〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03（3581）2331（代表）
FAX 03（3597）5617
E-mail geppo@ndl.go.jp

平成26年6月号（No.639）
平成26年6月20日発行 定価540円
（本体500円）

発売 公益社団法人日本図書館協会
〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14
電話 03（3523）0812（販売）
FAX 03（3523）0842
E-mail hanbai@jla.or.jp

印刷所 株式会社 ブルーホップ

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ（http://www.ndl.go.jp/）＞刊行物＞国立国会図書館月報でご覧いただけます。

表紙・本文 中性再生紙使用

「山椒喰（さんせうくゐ）」
小泉勝爾，土岡泉 著 『鳥類寫生圖譜』 第二期　第十輯
落合町（東京府） 鳥類寫生圖譜刊行會　昭和5（1930）年
1冊　45cm
「国立国会図書館デジタルコレクション」でご覧になれます
（館内限定）

国立国会図書館月報

平成26年6月20日発行（毎月1回20日発行 6月号 通巻639号）

発売：公益社団法人 日本図書館協会　定価540円（本体500円）

雑誌 03919-06

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。